

村野次郎創刊

香 蘭

二〇二〇年(令和二年)九月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第九号

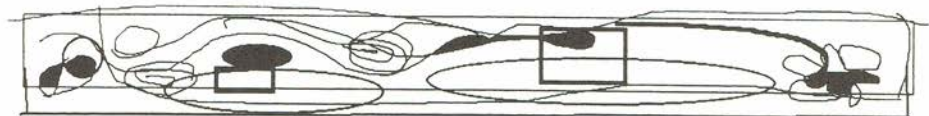


2020年(令和2年)9月号

第 97 卷

第 9 号

通卷 1077 号



香 蘭

2020年(令和2年)9月号
第97巻 第9号 通巻1077号

目 次

村野次郎作品 『私の愛誦歌』(61) 白井絹子：表二
作 品 2

一 25
二 32
三 39
推薦香蘭集 40
香 蘭 集 43

作品一特選(七月号) 飯島・石井・市川・伊藤(康)・大井田・川原・

作品二、三特選(七月号) 青山・岩田・白井・江口・岡野・本田・水本・室橋・
鈴木(桂)・西野・中井・中村(か)・
河野・小林(純)・竹本・田中・藤田・安田・

村野次郎への旅(126) 千々和久幸
歌の生まれる場所(92) 西 文枝

七首抄(七月号) 齋藤・田淵・大島・竹本
エッセイ・自由研究 水野泰子歌集『コンドルよ』を読む 鈴木桂子

エッセイ・自由研究 古事記に見る歌謡の役割 46
(その三・最終回) 49

私の読む現代短歌(3) 前川佐美雄の悲しみ(下) 近藤純
焦 点(七月号) 『心の動きを詠んだ歌』 田中あさひ

作 品 評(七月号) 作品一 香山静子
作品二 桜井京子
作品三 岡 元子

香蘭集 松 沢みどり
能 城春美
田 中あさひ

文法あれこれ(16) 原(ト)・澤田・徳測・小野・西崎・関口
緑 地 帯 66
64
62
60
58
56
54
52
49

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 桜井京子
歌集管見 高尾恭子歌集『裸足のステップ』評 75

歌会及び会合・他 73
70
66
64
62
60
58
56
54
52
49

編集後記・新宿日記 78
表紙絵 中村 陽子「重なり合って」 目次・緑地帯カット 和田 和雄
75
73
70
66
64
62
60
58
56
54
52
49

村野次郎作品 私の愛誦歌(61)

うつそみをさびしみ居ればのがれたる

蛍は夜の草に光りつ

『夕あかり』

大正十四年、次郎先生三十一歳の時の作。

はじめてこの歌に出会った時、ことばの表現がやさしいばかりか美しく、下句への流れが滑らかで、逃げていつてしまった蛍へのいとしさや、その眼差しに惹かれたのだった。

青春歌集といわれる『夕あかり』の前半期には、病む妻や幼子への思いが多く詠われている。この掲出歌には〈妻の一周忌近し〉の詞書が添えられており、癒えないまま若くしてこの世を去ってしまった妻への挽歌と思われる。耐え難い先生の思いが「のがれたる蛍」に擬人化され、さびしさが切々と伝わってくる。

掲出歌に加えて、幼子を詠まれている二首を添えて若き日の次郎先生を偲びたい。

妻やみてひとり遊べるをさなごにさくらの花をとりて持たすも (大正十三年)

をさなごをいたはり歩む休み日の丘のさくららは夕あかりせり (大正十四年)

『夕あかり』135頁、『村野次郎三百首』15頁に所収)

四 選 者 の 作 品

リビンクにて

平塚 千々和 久幸

爪切るも新聞読むも酔い痴れて倒れているもこはリビンクぞ
八十四、九十六また八十九 朝刊二十六面の死亡記事

朝ドラを見終りリビンクを後にする連載エッセイ今日は書かばや

晩酌をしている窓に夕焼けが見える 短歌はしよせん溜息

戸締りと歯磨きバジャマの洗濯は食後の仕事 手抜きはならず

三種類の常備菜のみ米を磨ぎ明日の天気を確認かめて寝る

生きるのは習慣だから苦はないさ それじゃアグッド・バイ明日あらばまた

看護師がラインにて送ってくれたるは妻の機嫌のよき日の画像

時間ばかりが

東京 桜井京子

海紅豆の花散りこぼれ道の辺を赤く染めたりまた夏が来る

ユリノキの花が団地に咲きはじめ時間ばかりが輝くやうな

目が覚めてつらつらものを思ふなりかの朝がほに支柱を立てな

脳内に前庭とふ場所あるゆゑに今朝の私はそこでふらつく

掃除することより他はかんがへぬ掃除ロボットが足元に來つ

ふる雨に濡れて勢きまへる睡蓮のこんなひと世があつてもよきか

人間もたいへんなんだと目を細めネコが見てをりベンチのうへに
姫沙羅の花が咲いたよ 長の子の妻身ごもるを手帳にしるす

くちなし

横浜 渡辺 礼比子

待つとなく待ちておりたる返信のハガキに咲けり貼り絵のキャン

人気なき谷戸の路地までもどりきてマスク外せば匂う梔子

片陰に咲けるくちなし純白の花のどこかがいつも崩くえいて

簡明に断り状をしたためしゆうべ土鳩の声の湿れる

書棚なる友の歌集の『歳月の隙間』を照らす夏至の夕つ日

マスクつけるつけぬ人あり顎の上を飾れるもあり梅雨の晴間を

カタキとも小蠅こばち忌む娘か麵つゆの罌を仕掛けて朝朝覗く

海かみ彼なるパパに見せんとみどり児にボール投げさせラインで流す

緋の鯉

鎌倉 香山 静子

思ふやうに歌を詠めねば斎園の鯉にでも会ひに行かうか

薄紅のあざさゝぬひつそり咲く径をゆきつつ人に会ふは稀なり

緋の鯉があんぐり口を開けてゐる模様のマスクが近付いて来る

マスクして近付き来るはあの女おんなと思へど目を伏せ通り過ぎたり

マスク買はんと人らは急ぐ流行の洋服などには目もくれずして

緊急事態解除の報せにマスクせぬ若きら闊歩する駅前広場

一日を籠もれど一首も歌詠めず紫陽花に降る雨眺めをり

苺り込みし庭木々擦り抜け来じ風よ身に心地よきはつ夏の風

作品一特選



(七月号作品から)

千々和 久幸 選

こもり居の日々

川崎 飯島 智恵子

貼り紙はたった一枚の掲示版「ふれあいサロン中止」の知らせ
「外出自粛」言われなくても老人の暮しは大方こんなものです
マスクして静まりかえるバス内を音かろやかに缶転げゆく
殊の外今年は苗がよく売れて園芸店主の顔がほころぶ
「桜咲く」合格通知手にすれど甥はいまだに上京出来ず
・常識の裂け目にアイロニーの毒を微量に効かせ読ませる。

三月書房

習志野 石井雅子

一時間生産性なき散歩して帰れば「えらい！」と子に褒めらるる
志村けん新型コロナウイルスで死去したり変なをぢさんまだまだあるが
ワシントンの桜泣かせてアメリカのコロナ感染増加止まらず
アベノミクスがアベノマスクにそしてアベノリスクになつた
夫待たせ歌書を探して覗きたる京都「三月書房」廃業決める
ハンサムな歯科医に歯を抜かれうつとりと窓に見てゐしマロニエの花
・時事への関心を「捻りし、ユーモラスで手応えのある歌にした。

京都・三月書房

東京 市川義和

京の街に足運ぶときいつも寄るは寺町二条の三月書房
定休日が火曜なるを知らず来てシヤッターしつかり閉まりてをりぬ
あるときは河野裕子の歌集見つけ署名本なれば直ちに求む
この書店古本屋にはあらねども店主穴戸さん頑固な爺さん
住まひ兼店舗なるゆゑここまでを継続できた三代目店主
・石井作品を結果的にフォローした。ここでも縁の下の力持ち。

だあれもない

東京 伊藤康子

ネモフィラの青き花群の映さるるだあれも来ないだあれもない
人集めに咲かされているチューリップ人集まると刈り取られゆく
花房に夜な夜な怪かしぶらさがり咲きつくような藤の花たち
ありがとう頑張る医療従事者へ東京タワーの青く輝く
手洗いと検温のみが頼りなる日に一回は笑うことにす
・短歌では善人や良識人になるべからず。破綻を求めて幅を広げるべし。

春

川崎 大井田 啓子

強風にさくら花びら舞ひをらむ冷水喉に心地よき真夜
終息と収束ともごもテロップに流れコロナウイルス乱舞す
決めかねてゐたるが行くと決めたらば今日の青空すこぶる高し
わが庭に舞ひ込みきたる花びらがそれより動く気配のあらず
マンションの垣根に山茶花咲き満てり永久に咲きゐるやうに動かず
・対象を真つ直ぐ把握するとみせて屈折を入れる処が芸。

顔は見えない 川越 川原 優子

銀行の開店祝の胡蝶蘭賑わいいしがいつしか消えぬ

最後まで自分が何で死んだのかわからず逝きし志村けんさん
眉と目をちやちやと描いてはいいお仕舞いマスクしてれば顔は見えない

一旦は沈みし小池百合子知事俄然目立つよ安倍さんよりも

・過不足なく詠めているが、この壁を突破出来れば一大飛躍が期待出来る。

四 月 西宮 鈴木 桂子

何処でも生きてゆけるさコンクリの亀裂に葦は今年も咲いて

しなくてもいいよ。結婚なんてもう大したことぢやないとは言はず

金があれば、金などなくても、聞いてゐるない弟とある姉の会話
国語教師になりそこねたる娘がわれのこの頃の歌さかんに褒める

あらそひて家を出でたり三時間外出自粛の夜ふけを歩む

・目下は新しい歌境を模索中、さらなる混迷と葛藤を深めよ。

瘦せ我慢 東京 西野 美智代

申し掛かるコロナコロナの真中に八十七年の生涯を閉づ

法廷に立ちし身形に整へて六法全書を棺に収む

本因坊に勝ちし記念の扇子なれば帰らぬ旅のかたはらに置く
絵のやうな男気見せて逝きたるが瘦せ我慢ではなかつたらうか

ひっそりと夫と二人の時が過ぐコロナ規制に吊問のなく

ほんたうに静かなりけり今時分基石並べて居る人亡くて

・夫の生涯を冷静に追悼する一連、自制心の強さに悲しみが滲む。哀悼。

「初上陸」 長崎 本田 民子

長崎に初上陸とう呼び声に買つてしまいいぬスイートポテト

空つぽの蜂の巣空家の軒先につままないよと風に吹かるる
空家には古きジャスマン絡みつき咲けば香りがわが家に届く

マスク不足を嘆いておればローソンの店員話に割り込んでくる

茗荷食めばもの忘れすると言ひし母茗荷は母を思いだす味

・巧まざるユーモア、巧まざるアイロニーが身についている。

仏の座 倉敷 水本 美恵子

よその子が飛ばすシャボン玉塀を越え庭に入り来てまた一つ来る

コロナより国民の命守るとぞ惜しまれてゐるかわれの命も
柿若葉の淡きみどりよ身守ると籠れば今年の春長きこと

台秤とらむと手先を泳がせてをれば夫の手ぬつと伸びくる

岡山の造り酒屋が造りたる七十八度はウイリスのため

・緊張感を途切れさせないこと、ローカル色を必要以上に意識しないこと。

夫と佇つ 群馬 室橋 玲子

今年また桜の下に夫と佇つこの喜びはわれだけのもの

明けの月輝く窓辺ああそうかスーパームーンだったか昨夜は
外出自粛 孫子に逢えず雨降れば畑にも行けず「酒だけか」と夫

大き手がしつかと掴みいてくる足のもつれて転びし時も

息子さんは何歳ですかと聞かれおり一応夫と妻なんです

・療養中の身を脱う気持が歌を初々しくした。弛緩を力に変えて。

作品二、三特選



(七月号作品から)

桜井京子 選

〈作品二〉

春 来 る

米子 青山侑市

焼き芋は安納芋に「紅はるか」ひとりで食めば天下泰平
老いづけば朝一番の鏡には吾を見詰むる親の顔あり

逝くならばある日ほつくり斃れたし春の日あまねき畑の中で
湯の街はひつそり閑と日も暮れて漫る歩きに月がつきそふ
・肩の力が抜けた詠みぶりで、新たな歌境のとは口に差し掛かった作者か。

アクティブに

安 来 岩田明美

草萌えの富田の河原に聞こえる史跡ガイドの野太き声が
戦国の世から甦ることくなるガイドの語りに尼子氏は落つ
人通りなき町すぢを四十雀の囀りだけがあまねく渡る

量り売りのエタノール求め帰る途に思ひ起こせるいつか来た道
・一、二首目は戦国の世を遠望するリアル。時間や空間を確かな視点で捉ええる。

折々の春

長野 白井 紀代子

大雪の後のうす陽の窓越しに携帯電話の翼をたたむ
さくら開花のニュースのトップになる国がコロナウイルスに先越されたり
春耕の鋤先にいる七星瓢虫を目の友として一日畑つ
ふわふわとなぞかけ遊びをするように風に揺れている雪柳の花
・季節の移ろいに目をとめ、現実からほんの僅か浮上したところが良い。

春の電車

柏 江口 絹代

薄青き車両はつかに臨かせて春の電車が宙をよぎれる
春嵐を受けて戸惑うさくら花 誰のひと世も長く短かし
十三階の窓から見えるリフレッシュプラザというは焼却場なり
籠もる日はニュースを語る女子アナの顔の疲れが気になっている
・現実を凝視しながら異界のこのように歌う。

マ ス ク

尾 道 岡野 甫 江

包丁を取りて身を撫ぶ桜鯛螺細のやうな鱗をこぼす
この花のために青空あるやうな丘に一本白れんの花
マスクして眼玉だらけの街となり見えない敵と戦つてゐる
中止する相談しつつしばらくは先行き見えぬ日々を思へり
・一、二首目の色彩的な美しさ、三、四首目の事柄の把握に鋭さが見える。

喜ぶべきか

宇 治 中井 房 江

やわらかく色づきゆける一山よ微笑むように山ざくら咲く
一人居のテレワークの子はやばやと帰省自粛を告げてくるなり
誰も誰も顔半分で見分け合う知り人とても近づきすぎず

人がみな家に籠もつて二酸化炭素排出半減 喜ぶべきか

・身の丈に合わせた詠みぶりと見せて、微かな批判精神も垣間見える。

不要不急

福岡 中村 かよ子

コロナ禍に気付きし一つ八割の不要不急で私は生きてる

踏み出だす一步は進歩か後退か明後日から見ると明日が知りたい

噛む前に飲んでしまった飴玉はどこか似ている戻らぬ世界

書き込みのひとつすら無きカレンダー二日残して四月を破る

現実を笑つちやだめかステイホーム「ハウス」と言われた犬の気分だ

・冷めた目で現実を眺め、奔放に思惟の深みに向かおうとする。

〈作品三〉

ツイッター映え 鎌倉 河野 慎二

ウィルスの蔓延る街を避け春の波を喜ぶ無数のサーファー

独り居のさみを見ぬまに春蘭けて残るくまなき庭の十葉

つい酒に手がのび昼から足もとのおぼつかなくて荒むわが身は

花粉飛ぶ季節よなべて鬱陶しいツイッター映えするカフェ・アート

・鬱屈した気分の中から煌めくものを取り出して見せる着眼の良さ。

君のアウトデイ 横浜 小林 純子

雪を乞ひ雨を乞ひてもなほ渴く真孤の沼は姿うつさず

冬枯れの大地にもがき嘴太がミミス唾へて目指す天上

母と子に無為の時なくミルクティゆつくり煮出すミント沈めて

・言葉が立ち過ぎる面があるが、場面をドラマのように切り取る手法が鮮やか。

寒ざむと 千葉 竹本 幸子

隔日の交代勤務の我が職場テレワークにはならないらしい

三密になつてはならぬと距離をとり寒ざむとしてこの春がゆく

看取られず見送られずに灰となる私もコロナで死にたくはなし

・事実に沿つて詠みながら見るべきところを確かな視点で捉えている。

燥いではダメ 取手 田中 あさひ

「初心者にも育てやすい」褒められてゐるのだたぶん素心蠟梅

足腰をあたためながら春を待つころに蠟梅の花を咲かせて

客人のうぐひすに双の耳ひらく邪悪の惑星のマスク人われ

・一、二首目の蠟梅に託した密やかな思い、三首目の煌びやかな技巧に瞳

目。

○ 横浜 藤田 祐恵

あの夏の集合写真の私が今のわたしに微笑んでいる

ゆるやかに桜並木はカーブしてシャープなバイクが溶けこんでゆく

いつどこでぶつめたのかもわからない青痣だけど証拠かこれは

・対象を真つすくに見つめ輪郭がくまやかである。

春の野面に 行田 安田 恵子

庭石にマイマイが残す銀の線迷走跡は照りて陽の中

捨てられて解けて蓬けし藤椅子は春の野面に貌をなくして

病院は春陽にゆれて隣家に行く気軽さで夫入院す

・叙情性があり、確かな描写で巧みに詩情を掬い上げている。

村野次郎への旅（126）

「ザムボア」と次郎（十八）

「ザムボア」（朱楽）第四卷第八號は、大正七年（1918年）八月五日發行、編輯兼發行者河野慎吾、發行所紫烟草舎として刊行された。表紙、裏繪は前号と変わらず、総頁は29頁で奥付が30頁目にある。その後、朱楽基金募集、広告が3頁掲載されている。

村野先生の作品は、河野慎吾と同じ詠草欄の第一頁に掲載されている。上段が河野慎吾で、下段が村野先生の作品で共に八首。先生は「夕あかり」八首である。

①軒下に夕日のこれり飛ぶ蟲のかすかに今日は暮れにけるかも

②穴蜂の井戸邊の水に通ひ來る軒端も今は夕あかりせり

③庇邊の明りに蟲は飛びてゐる心安さに夕べを待つも

④真夏日の衝を走る電車の中汗流るるにわが

千々と久幸

坐り居る

⑤東の間を眠りしかもよ真夏日の電車に疲れ眠りしかもよ

⑥真晝日の熱まだ冷えぬ四辻の餘光の中を電車にのぼる

⑦家の内あかるくなれり眼のまへの街路を人の馬牽き行けり

⑧銀杏の樹に朝雨はれて葉かげより金魚賣る聲涼しく聞ゆ

いまわたしは昭和六十三年（1998年）

十二月に發行された村野先生の歌集『夕あかり』を手にかけている。この歌集は先生の没後、『香蘭』六十五周年記念事業の一環として企画、刊行されたものである。

収録作品は『樗風集』以前の大正三年（1914年）9月より昭和二十二年（1947年）十二月までの作品九十六首が収められて

いる。

この場でのわたしの拘りは、「夕あかり」というタイトルについてである。先生には早い時期から処女歌集に『夕あかり』というネーミングが温めてあった。そのことを伝え聞いたわたしは、未刊歌集であるこのネーミングに異議を唱えたのだった。そのことを「香蘭」のどこかに書いた筈だが、その一文を今探す時間的なゆとりがない。

当時のわたしに「夕明かり」は「余光」のイメージであり、いわば午後五時の太陽だった。これから斯界に打って出ようという処女歌集に、青年の匂うような眩しさも野望もまた矜恃も客気も感じられないこのネーミングは、不似合いだというのがその折の気持だった。「夕明かり」のイメージを、凡庸な既成概念で捉えていたせいであつた。未熟者の早トチリという他はない。

あてどなきあくがれかなしあはあはと今日も消のこる夕明り空

『樗風集』の昭和三年の項にあるこの一首こそが先生の短歌が指向するものであつた。先生の短歌観はこの一首に集約されている、と言つていい。これをロマンチズムと言わず

して何と言おう。

さて前口上が長くなったが、このたび「ザムボア」誌上にその小題を見るに及んで、先生の拘りの深さを再認識したのだった。

①の歌、落ちついた観照で、成熟した大人の歌という印象である。破綻なく終わった一日を自足して、呼吸の乱れがない。軒下の夕日も飛ぶ蟲も胸に畳み込んで、ひと日の終わりを微かな哀感の中に受容している。

②の歌、「夕あかりせり」の結句で、良くも悪くも眼前の光景が包み込まれて仕舞った。穴蜂も井戸邊の水も軒端の夕あかりも、かくて一場のドラマは終幕。後は夕あかりがやがて闇に覆われるであろうひと時のドラマを見守っている、という趣である。

③の歌、①②の歌に比べると、この歌には「けるかも」「夕あかり」のような引幕がないから、いささか騒がしい声が洩れてくる。平たく言えば、表現すべき事柄が順次に並べられ、引幕たる「夕べを待つも」から頭を出してしまったという感じである。

就中、「心安さに」の主観語は突出しすぎたのではあるまいか。

④の歌、事柄は誰しも経験するところで、よく解る。よく解るがゆえに、実感が感情に立ち止まる余裕を与えなかった。一息に歌うことが不都合な訳はない。が、この歌の場合はその前のめりの実感が陰影を生む時間を奪った、ということである。

気持の方が一萬千里に走りすぎて、歌が平板になったということではあるまいか。

⑤の歌、④の歌と同じ場面を切り取っているが、二、五句のリフレインが見所である。誰しも体験があるに違いない平凡な情景を、この砕けたリズムが救っている。

リフレインは先生には珍しいが、師の白秋作品には散見しお馴染みである。

⑥の歌、都内を走る路面電車（東京市電）が思い浮かぶ。日没のあと、用事を終えてまだ昼間の気温の下からぬ電車に乗ろうとしている。そんな昼から夜へ移り変わる情景を、東の間の自足の中に捉えている。まだ事柄が先だつ感じは残るものの、結句は作者の強調したいところだろう。

⑦の歌、一連の流れの中にある歌だと読めば、一、二句は、宵の口を人に引かれて行く馬だが、作者が家の内にいるのか外にいるの

かによって読みが別れよう。

前者なら静止した光景の中に突然人と馬が現れ、家のうちに明かりが射したように感じたととなり、後者なら街路に面した家の内の明かりが灯り、その明かりで目の前を行く人と馬がはっきり見えたとなろう。リアリズムの立場だと、後者になる。

⑧の歌、この一首は明らかに「夕あかり」一連の外にある歌である。短歌の場合、一連を時間の経過を追ったドラマ（出来事）として読むか、一首独立した作品（ドラマ）として読める場合もある」と読むかは、作者の意図にかかっているが、読者が勝手にドラマと読んで仕舞う場合もある。

一般論で言えば、一連をドラマにした方が作者は詠みやすく、読者は起承転結の妙が楽しめよう。村野先生の場合は、おおむね一連はドラマ（同じ素材）になっている。

⑧の歌は朝の光景だから、これまで読んできた「夕あかり」一連の外にある。雨後の朝の爽やかな空気の中から聞こえてくる金魚売りの声、もうこれだけで歌になる。しかし作者は「銀杏の樹」「葉かげ」「涼しく」と細部を丁寧に描写した。異論はあろう。